

令和 5 年 1 月 2 3 日

所属校名 福岡市立箱崎清松中学校
職・氏名 教諭 土山 浩基
指導者名 篠田 穰
横光 雄介

研修最終報告書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

1 研修種別 C 福岡教育大学附属福岡中学校研修員

2 研修場所及び所在地 福岡教育大学附属福岡中学校
〒810-0061 福岡市中央区西公園 12 番 1 号
電話番号 (092) 771-8381
FAX 番号 (092) 732-1147

3 研究主題及び副題

地域の持続可能性を見出すことができる生徒を育む社会科学学習指導法の研究
～3つの評価活動を学習過程に取り入れて～

4 研究内容の概要

(1) 研究の目標

地域の課題に対して持続可能性の視点を踏まえた解決策を見出す生徒を育てるために、3つの評価活動を取り入れた社会科学学習指導法のあり方を究明する。

(2) 研究の仮説

地理的分野の「世界の諸地域」の学習における各段階において、持続可能性の視点を踏まえた評価活動を取り入れれば、地域の持続可能性を見出す生徒を育成することができるであろう。

(3) 研究の内容

○ 持続可能性の視点を踏まえた解決策を見出す生徒を育てるための、3つの評価活動を取り入れた学習過程の在り方

(4) 主題・副主題の意味

① 主題について

「地域」とは、ある指標によって意図的に区分された空間領域のことである。地域は、便宜的にその範囲を区切って設定した形式地域と、現実的に意味をもつ範囲で区切った実質地域がある。形式地域に基づく学習活動では、地域を成り立たせている諸事象の因果関係を追究することで、地域的特色を構造化して捉えることができる長所をもつ。そのため、世界の諸地域を扱う本研究では、中学校社会科地理分野で採用されてきた世界を6つの形式地域に区分したものを基本とする。

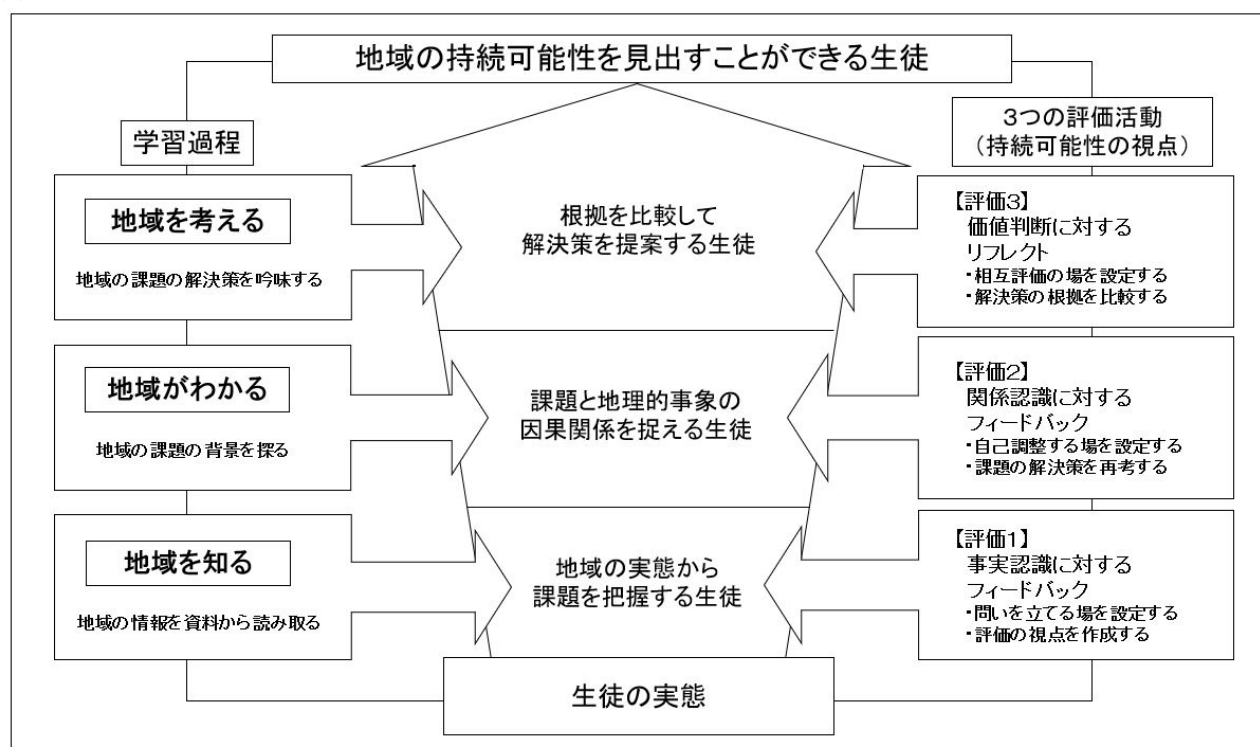
「持続可能性」とは、人類が他の生命をも含めた多様性を尊重しながら、地球環境の容量の中で、いのち、自然、くらし、文化を次の世代に受け渡し、よりよい社会の建設に意志をもってつながり、地域間・世代間をまたがる最大多数の最大幸福を希求するシステムのことである。

「地域の持続可能性を見出すことができる生徒」とは、地域が抱えている課題に対して、地理的な見方・考え方を働かせて持続可能性を追究することを通して、根拠に基づく地域の将来像を提案することができる生徒である。澤井（2021）は、「主体的に学習に取り組む態度」を「学びに向かう力」と捉えることができると述べている。地域の課題は、一度解決ができていても状況によっては再発したり、新たな課題となって生じたりするため、他の課題が今後生じることを予測することが必要となる。したがって、本研究では、地理的な見方・考え方を働かせることを通して、根拠に基づく地域の将来像を提案することが、地域の持続可能性を見出すことができる生徒を育むことにつながると考え、主題を設定した。

② 副主題について

「3つの評価活動」とは、各学習段階において生徒の思考を可視化する活動を設定し、持続可能性の視点（将来にわたって現在の社会の機能を継続していくことができるか）を含む評価基準を基に、フィードバック等を行うことである。米田（2021）は「①既習知識を活用し、学習課題への仮説を立てる場面。」「②対話により習得した内容をもとに、学習課題への仮説を立てる場面。」「③学習課題解決後に、新たな問いを立てる場面。」の3つの場面に主体的な態度が顕著に表れ、評価対象となるとしている。このことを、岩田（2008）による「授業設計」に即して整理すると、自ら追究する学習は、地域の課題を把握して地理的な見方・考え方を作りあげていく学習過程と、地域の将来を予測していく学習過程を組み合わせることで可能になるといえる。具体的に、1つ目は地域を知る段階で、既習知識を活用し、地域の課題解決策の仮説を持続可能性の視点を踏まえて見出すことができるかフィードバックを行う。「仮説」とは、学習課題の解を既習知識や対話により獲得した内容を活用し、それを根拠として示すことである。2つ目は、地域がわかる段階で、地域の課題について、明らかになった因果関係と解決策の仮説の比較を通して、解決策の再考ができたのかフィードバックを行う。3つ目は、地域を考える段階で、根拠に基づく解決策を提案し、地域の持続可能性を踏まえた未来予測ができたのかリフレクトを行うことが重要と考える。

(5) 研究構想図



(6) 検証の方法

- 振り返りシートの内容分析、抽出生徒の様相観察及び分析

(7) 実践と考察

- ① 題材「アフリカ州」
- ② ねらい

パフォーマンス課題を設定してアフリカ諸国の持続可能な経済発展に貢献できる事業分野を追究することを通して、アフリカ州の貧困問題の要因を捉えさせることをねらいとしている。

③ 授業の実際

ア 「地域を知る」段階

この段階のねらいは、アフリカ州の多様な自然環境を捉えさせ、地図帳の主題図や統計資料から貧困問題を把握することで、アフリカ州を発展させるための持続可能な事業について見通しをもたせることである。持続可能な事業であるかどうかを吟味させるために、「貧困を解消できるか」「持続可能であるか」「利益がでる事業であるか」「実現できそうであるか」といった評価の視点からフィードバックを行い、レーダーチャートを用いることで思考を可視化させた。

まず、アフリカ州のイメージを具体的に表現させるために、位置や自然環境を【資料1】のように白地図に示させ、アフリカ州の位置や空間的な広がりをつえさせた。

次に、アフリカ州の地域的課題を把握させるために、経済状況に関する統計資料を提示して考察させた。ここでは、きわめて貧しい暮らしを強いられている人の数と割合の推移をもとに、主要援助国のODA実績と比較させて、アフリカ州の地域的課題を見出させた。すると生徒は、世界全体で見ると貧困は減少しているが、アフリカの貧困の割合が減少していないことに気付いた。

最後に、アフリカ州を発展させるための持続可能な事業について予測をさせた。ここでは、既習の知識と分析した地理的事象をもとに、事業案の妥当性を吟味するための評価の視点を4つに分類させて、【資料2】に示すレーダーチャートを用い、振り返りシートに記述させた。すると生徒は、「貧困解消にはつながりそうだが、持続可能性は低い」など、4つの視点を踏まえた事業案を作成することができた。

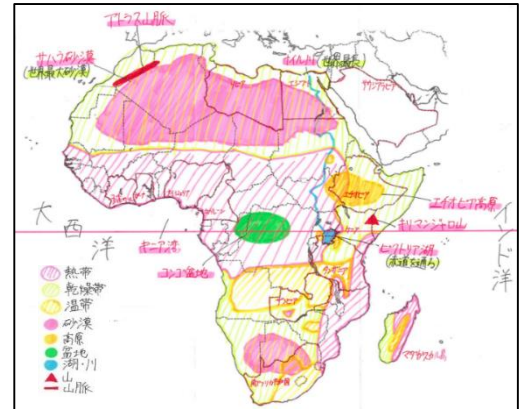
イ 「地域がわかる」段階

この段階のねらいは、植民地支配の歴史的背景や一次産品に依存するモノカルチャー経済といった貧困問題の要因を探る活動を通して、貧困を解消するにふさわしい事業を再考させることである。日本企業がアフリカに進出するメリットは何かを問うことで、アフリカ州の強みを捉えさせることへとつなげた。

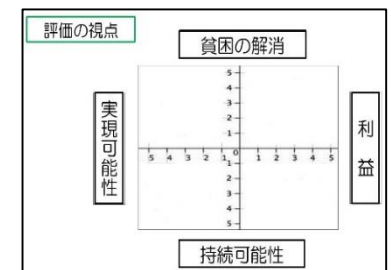
まず、アフリカ州の植民地支配の歴史が及ぼす影響について調査させた。ここでは、難民支援対象者の推移をもとに、紛争が絶えない経済状況によるインフラの未整備といった貧困問題の背景にある歴史的な事象を捉えさせた。次に、貧困問題の要因が資源の偏在や産業構造にあることを踏まえ、アフリカ諸国の経済状況を比較させて確かめさせた。ここでは、おもな国の輸出品目の変化を示した主題図を提示し、南アフリカ共和国の産業構造が工業化に向かって変化していることから、モノカルチャー経済の問題点を指摘させた。また、旧宗主国との関係から、貿易における近隣諸国とのつながりが弱く、産業構造を変化できずにいるといった空間的相互依存作用の差異から貧困問題の背景にある事象を捉えさせた。

最後に、貧困解消にふさわしい事業について、アフリカ州の強みを踏まえて再考させた。ここでは、アフリカ州の強みを見出させるために、アフリカ州の生産年齢人口の推移や鉱産資源の分布を示した主題図を提示して、日本企業がアフリカに進出するメリットは何かを問うた。すると生徒は、人口増加による消費市場の拡大や豊富な資源の確保と答え、【資料3】のようにアフリカの強みとなるものを捉えることができた。そして、貧困解消にふさわしい事業について、【資料2】にアフリカの強みを加えた視点からフィードバックを行い、表現させた。すると生徒は、【資料4】に示すレーダーチャートを用い、振り返りシートに再考した考えを記述することができた。

【資料1】アフリカ州の自然環境を示した白地図



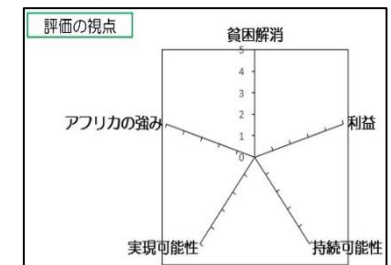
【資料2】評価の視点



【資料3】アフリカの強みを踏まえた事業案



【資料4】評価の視点



ウ 「地域を考える」段階

この段階のねらいは、単元を貫く課題「なぜ、貧困はなくなるのだろうか。サブサハラを発展させるための持続可能な事業を提案しよう」について、アフリカ州の貧困問題の解決策を持続可能性の視点を踏まえて構想し、根拠に基づくプレゼンをグループで作成する活動を通して、アフリカ州の地域的特色を捉えさせることである。

そのためにまず、これまでの学習で明らかになったアフリカ州の地理的事象を踏まえて、事業を行う地域の情報収集と課題の背景についてタブレット端末で調べさせた。ここでは、分析した地理情報を白地図や主題図等で示し、貧困解消に向けた方針や事業の具体的計画を立案させた。すると生徒は、【資料5】のようにプレゼン資料を作成し、アフリカ州における貧困問題の持続可能な解決策について、根拠となる資料をもとに表現することができた。

さらに、立案した解決策が具体的であり、持続可能性や実現可能性があるかどうかを吟味させるために、【資料6】に示すルーブリック表をもとに相互評価を行わせた。ここでは、「貧困を解消できるか」「持続可能であるか」「利益がでる事業であるか」「実現できそうであるか」といった視点に「アフリカの強みを生かしているか」の視点を加えて、5段階で評価させた。すると生徒は、5つの視点を踏まえたレーダーチャートと、最初のレーダーチャートの比較を通してリフレクトを行い、サブサハラを発展させるための持続可能な事業案について根拠に基づく振り返りを記述することができた。

④ 考察

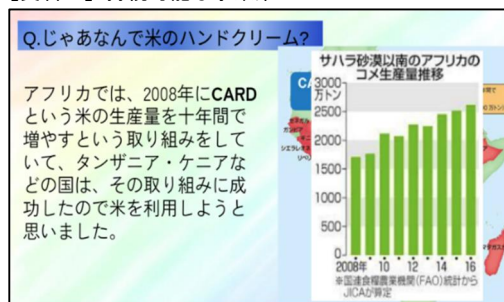
視点1

「地域を知る」段階において、アフリカ州の地域的課題を解消するための事業について見通しをもたせるために、レーダーチャートを用い、4つの視点から持続可能性を見出させたことは、アフリカ州の地域的課題を把握させる上で有効であったか。

ここでは、アフリカ州の地域的課題を把握する生徒の姿を、アフリカ州の貧困問題について、解消するための事業案を持続可能な視点を踏まえて記述した姿と捉える。抽出生Aは、利益の期待できるハイテク産業を扱う事業を提案し、質の高い教育が必要であると記述した。また、問題点として貧しい生活を強いられている国にとって、子どもは重要な働き手であり、教育費が払えないのではないかという疑問から、持続可能性の低い提案であると記述することができていた。そもそも抽出生Aは、経済成長に必要な要素を他地域の学習から知識として備えていたが、そこに持続可能な視点から分析を行わせることにより、技術水準の向上に必要な人材の育成を見出すことができているといえる。抽出生Bは、切り株を使った飲食事業の提案を記述した。現地のモノを活用して利益を上げる点で、アフリカ州の地域的課題が貧困問題にあることは気付くことができているといえる。しかし、事業の問題点について、【資料7】の下線部のように環境への悪影響から述べたものであり、事業の持続可能性から述べられたものではない。そもそも、地理学習を苦手とする抽出生Bにとって、サブサハラの自然環境の特色や社会を建設していく側面など、地域間・世代間をまたがる分析が困難であったと考えられる。

以上のことから、「地域を知る」段階で、4つの視点から持続可能性を見出させたことは、アフリカ州の貧困が増加傾向にあり、継続的な支援があるにも関わらず、有効に働いていないといった地域的課題を把握させる上で有効であったと考える。一方で、持続可能な視点から地域の課題を解消するための見通しをもつことができない生徒が見られた。地域の持続可能性を見出させる際、人と場所の相互依存関係を示す資料を選択したり、教師が視点を与えたりする工夫が必要である。

【資料5】持続可能な事業案



【資料6】ルーブリック評価表

	貧困解消	持続可能性	利益	実現可能性	アフリカの強み
5	貧困解消に確実につながる	将来にわたって持続する	多くの利益が期待できる	実現する可能性が高い	十分に生かしている
4	貧困解消につながりそう	持続可能性が75%	利益が期待できる	実現する可能性がやや高い	生かしている
3	貧困解消につながるかどちらともいえない	持続可能性が50%	利益が少ない	どちらともいえない	どちらともいえない
2	貧困解消につながりにくい	持続可能性が25%	利益が生まれない	実現する可能性がやや低い	生かしていない
1	貧困解消の利点がない	持続可能性の利点がない	利益の利点がない	実現する可能性が低い	強みの利点がない

【資料7】抽出生Bの最初の考え

【最初の単元を貫く課題に対する考え】	
〈事業〉	切り株を使った飲食店
〈理由〉	サブサハラでは、たくさんの木が伐採されています。木を材料として使う部分は、木の幹が多いので、残っているのは、切り株が残ります。そのため、飲食店設立の経費が削減でき、大量の利益が生まれるからです。
〈問題点〉	切り株を使うということは、伐採がたくさん行われているということになるので、環境的によくない点。

視点2

「地域が分かる」段階において、アフリカ州の強みを見出させるために、諸資料を用いてアフリカ州が抱える貧困問題の背景を探らせ、地理的事象の因果関係を明らかにさせたことは、持続可能な事業案を再考させる上で有効であったか。

ここでは、アフリカ州が抱える貧困問題の背景を探り、地理的事象の因果関係を明らかにした上で、持続可能な事業案を再考する生徒の姿を、次のように捉える。まず、アフリカ州の貧困問題の背景には複数の要因があることを認識していること。そして、これらの姿を解消する要素となり得るアフリカ州の強みを踏まえた事業案を再考できたかを振り返りシートに記述できたかを分析する。抽出生Aは、アフリカ州の強みをハイテク産業に必要なレアメタルなどが豊富に眠っていることと、労働者の確保ができることであると記述した。豊富な鉱産資源を生かすことで、ハイテク産業で生産される製品の原材料の確保と安定した供給が期待できるため、事業の持続可能性が高まると気付くことができた。また、生産年齢人口の増加から、労働者の確保が容易で、低所得層の所得向上と消費の拡大につながる可能性について記述することができた。

このことに関して、抽出生Aは貧困問題には様々な要因があり、それらが複雑に関連していることから、モノカルチャー経済から脱却するには、アフリカの強みを生かすことだと気付くことができたものと考えられる。抽出生Bは、【資料8】の下線部のようにアフリカ稲作振興の共同体であるCARD (Coalition for African Rice Development) が、サブサハラの米の生産量を倍増させる目標を達成したことに着目して、アフリカの強みを大規模な農業生産が行える自然環境と記述した。お米を使ったハンドクリームを扱う事業で感染症予防に貢献すれば、病死者を減らすための衛生環境の改善につながることを捉えることができた。

以上のことから、「地域が分かる」段階で、アフリカ州が抱える貧困問題の背景を探らせ、地理的事象の因果関係を明らかにさせ、他地域との比較によってアフリカ州の強みを見出させたことは、持続可能な事業案を再考させる上で有効であったと考える。しかし、アフリカのどの地域で行う事業であるかといった空間分析が不十分であった。

視点3

「地域を考える」段階において、サブサハラを発展させるための持続可能な事業案をプレゼンさせるために、グループで企画書を作成させ、事業の妥当性を5つの視点から相互評価させたことは、アフリカ州の地域的特色を捉え、持続可能な貧困問題解消への根拠を比較する上で有効であったか。

ここでは、アフリカ州の抱える貧困問題が解消できる事業案について、持続可能性を踏まえてプレゼンする生徒の姿を次のように捉える。まず、アフリカ州の貧困問題の背景には複数の要因があることを認識していること。さらに、そのような産業構造から脱却できない要因を明らかにしていること。そして、これらの姿を解消する要素となり得るアフリカ州の強みを踏まえた事業案を提案していること。事業案を持続可能な視点から相互評価によって比較させたことで、根拠に基づく振り返りが記述できたかを分析する。抽出生Aを含むグループは、「教育で変えるサブサハラ発展計画」と題した事業提案をまとめた。今なお続く紛争といった貧困問題の背景を踏まえて、産業の多角化と高度化に言及しており、アフリカ州の強みである豊富な労働人口や鉱産資源を生かす事業を提案することができた。さらに、きわめて貧しい生活を強いられる地域において、学校をつくるだけでは働き手である子どもを奪われかねない問題点を挙げている。このことに関して、抽出生Aはアフリカ州における貧困問題と地理的事象との因果関係を十分に捉えている。そのため、持続可能な発展の実現には、高等専門学校整備に従事する事業を立ち上げ、専門技術を習得した人材を

【資料8】抽出生Bの再考した事業案

【最初の考えと比較した課題に対する考え】
＜事業＞
お米を使ったハンドクリーム
＜理由＞
アフリカでは、2008年から2018年までの間の10年間に、お米の生産量を増やすという「CARD」という取り組みが行われ、サブサハラ地域では、その目標を達成することができたので、その強みを利用しようと思ったから。サブサハラ地域では、トリパノソーマ症という傷口に寄生虫が入ることで感染するものがあります。衛生環境の整っていないアフリカでは、手のあがざれが多いので、ハンドクリームをぬることで、感染症による死者が減り、持続可能性が高まると思ったからです。

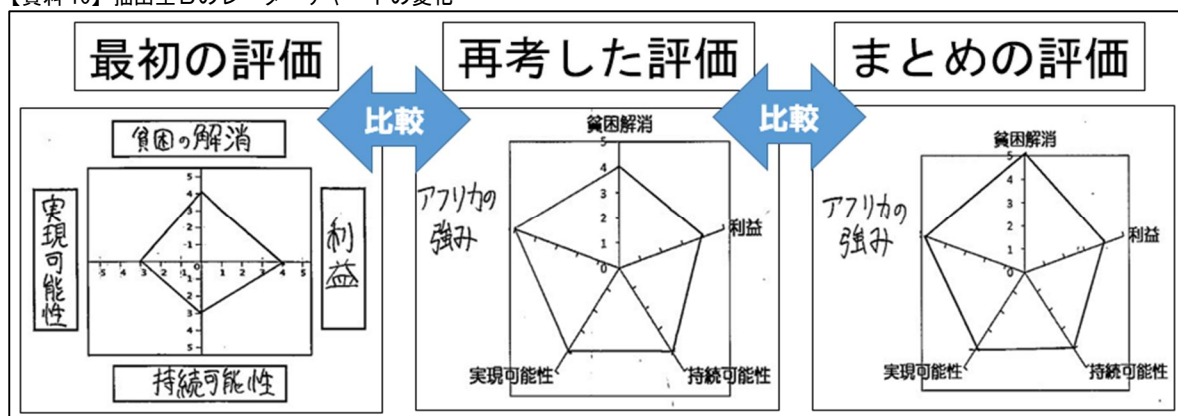
【資料9】抽出生Bのまとめの考え

【まとめの単元を貫く課題に対する考え】
＜事業＞
コンゴ民主共和国で教育をうけた就職サポート
＜理由＞
上記の事業は、みんなの発表を少し参考にして、私の考えていた事業にしました。もので、コンゴでは識字率が低いので、コンゴでこの事業を行い、基本的な教育をうけさせる(貧困解消につながる)そして、卒業したら、ハンドクリーム会社に就職先を提供。お米がたり食べることできる(これも貧困解消につながる)しかも、アフリカの強みを最大限に活かしているという理由から、私は上記の事業を提案します。

社会に送り出すことに気付くことができたと考えられる。抽出生Bを含むグループは、貧困解消につながる「お米のハンドクリーム」製造事業を提案した。個人で考えた際には、アフリカの強みである自然環境を生かした農業に着目することができた。さらに、グループで再考することで、アフリカの貧困問題の要因である識字率の低さに気付く、【資料9】（p. 5参照）の下線部のように教育が必要である視点も加えて振り返りシートに記述することができた。

以上のことから、「地域を考える」段階で、サブサハラを発展させるための持続可能な事業をプレゼンさせるために、グループで企画書を作成させ、5つの視点から相互評価させたことは、アフリカ州の地域的特色を踏まえた事業案を比較・吟味させることができたことから、有効であったと考える。また、【資料10】のように、各学習段階において生徒の思考を可視化するレーダーチャートを用いて、持続可能性を含む評価の視点からフィードバックを行わせたことは、貧困問題の解消にふさわしい事業であると言えるのか、自らの考えの比較や再考を促し、具体的な提案につながったと考える。

【資料10】抽出生Bのレーダーチャートの変化



5 研究の成果と課題（○は成果，●は課題）

- 「地域を知る」段階で、アフリカ州の地域的課題を解消するための事業について、4つの視点から持続可能性を見出させたことは、アフリカ州の地域的課題を把握させる上で有効であった。
- 「地域がわかる」段階で、アフリカ州が抱える貧困問題の背景を探らせ、他地域との比較によってアフリカ州の強みを見出させたことは、持続可能な事業案を再考させる上で有効であった。
- 「地域を考える」段階で、グループで持続可能な事業を作成させ、5つの視点から相互評価させたことは、アフリカ州の地域的特色を踏まえた事業を根拠に基づき提案させることができ、有効であった。
- 「地域を知る」段階において、教科書や地図帳の主題図や統計資料から地域的課題を把握させる際、持続可能な視点から捉えた根拠を示すことができない生徒が見られた。地理的事象と持続可能性との関連を発見させるための資料の提示や生徒の思考を揺さぶる問い返し、助言が必要である。
- 「地域がわかる」段階において、地域的事象が発生した原因や影響と、地域的特色の強みとの間の関連に気付くことができない生徒が見られた。そのため、空間的な相互依存関係やスケール移動に気付かせることができるような資料提示や問い返しが必要である。
- 「地域を考える」段階において、地域の持続可能な発展を見出すことはできたが、ループリックによる評価が一元的であり、地域の持続可能性について内省しようという意識が生まれていない生徒が見られた。そのため、ループリックに基づく評価の規準を明確化し、地理的な見方・考え方を働かせられるように、示された根拠が持続可能な発展に結びつくといえるのか、問い返しを設定する必要がある。

6 研修を修了しての感想

本研究を通して、各学習段階で持続可能性の視点を含む評価規準を基にフィードバックを行うことで、地域的課題の解決に見通しをもち、地理的な見方・考え方を働かせて再考し、地域の将来像を見出そうとする態度につながったと考えている。自分自身も研究を通して、単元レベルでの学習計画や指導技術を多くの先生からご指導頂き学ぶことができた。今後も生徒が自ら学び、主体的に社会に参画できるような社会科学学習指導法の研究を続けていきたい。

備考

- 在籍校 福岡市立箱崎清松中学校
電話番号 (092) 612-1237

1 単 元 「南アメリカ州」

2 指導観

- 南アメリカ州に広がるアマゾンでは、熱帯林が失われ、動植物の絶滅や地球温暖化の進行が心配されている。開発が国を豊かにし経済を成長させる反面、環境を破壊し将来の世代に大きな影響を与えている。持続可能な社会の実現に消費主義に支配されている人々の営みが問われている。

本単元では、パフォーマンス課題を設定して森林破壊が続くアマゾンで、持続可能な開発への取組を追究することを通して、南アメリカ州の地域的特色を捉えさせることをねらいとしている。学習内容としては、自然環境と人々の生活の関係、南アメリカ州と世界のつながり、アマゾン開発の恩恵と課題の因果関係、環境保全の取組とブラジル社会の新たな課題の相関関係、アマゾン開発の是非をめぐる様々な立場からの意見、アマゾンの持続可能な開発に向けた取組などがある。ブラジルは、モノカルチャー経済から脱却し、経済的自立を目指してきたが、発展と引き換えに多くの森林が失われる結果となった。経済活動と環境保全の両立というジレンマを、立場をかえて捉えさせることで、地域の課題を吟味する力を身につけさせることができる。以上のように、本単元の学習で、南アメリカ州の地域的事象の分析から、持続可能な社会を築くための取組を追究することは、資源と人々の営みの関係に見られる共通の課題を捉えさせる点でも大変意義深い。

○

個人情報保護のため、
生徒観は省略しています。

- 本単元の指導にあたっては、単元を貫く課題を「アマゾン開発はどうあるべきか提案しよう」と設定し、持続可能な社会の実現の視点から南アメリカ州が抱えるジレンマについて、立場をかえて多面的・多角的に追究させる。また、学習の各段階で単元を貫く課題を振り返らせて、自分の考えを吟味できるような学習を仕組む。そのためにまず、南アメリカ州の地域的特色を捉えるための学習の見通しをもたせる。ここでは、日本との関わりを捉えさせるために、資料から読み取った熱帯林の破壊による林産物や農産物を輸入している国々の割合に着目するように促す。次に、アマゾンで森林伐採が進む理由と環境保全の取組について調べさせる。ここでは、熱帯林がもたらす恩恵と経済成長の因果関係に気付かせるために、ブラジルの輸出入品目の変化や経済格差の広がりに着目させ、経済発展と環境保全の両立が困難な理由を問う。さらに、持続可能な開発にふさわしい取組を再考させる。ここでは、南アメリカ州の強みを見出させるために、開発計画をめぐる様々な意見を提示し、根拠となる資料は何かを問う。最後に、アマゾン開発にふさわしい取組を作成させ、プレゼンさせる。ここでは、取組の妥当性について、持続可能性の視点から相互評価する場を設定し、学習内容の振り返りから南アメリカ州の地域的特色を捉えさせる。

3 目 標

- 南アメリカ州における経済活動と環境保全の相関関係について、多様な自然環境や豊富な鉱産資源と関連付けながら説明することができる。
- 南アメリカ州に見られる人間と自然環境の相互依存関係について、産業構造の変化、地球環境問題への影響の資料をもとに表現することができる。
- 南アメリカ州の発展が今後も持続可能なものとなるための取組を、日本も大きく関わる問題として意識し、主体的に追究しようとしている。

4 計 画 (6 時間)

知：知識・技能 思：思考・判断・表現 態：主体的に学習に取り組む態度

次	配時	学習活動・内容	手だて (○), 研究に関わる手だて (◎)	評価規準
地域を知る	1	1 南アメリカ州の地域特有の課題を捉え、学習の見通しをもつ。 ・南アメリカ州の自然環境 ・アマゾンの森林伐採面積の累計 ・熱帯林消失と日本の生活の関係	○ 南アメリカ州のイメージを具体的に表現させるために、根拠となる資料を問う。 ◎ 単元を貫く課題の見通しをもたせるために、他地域で学習した経済発展の概念を活用させ、持続可能な視点を踏まえたルーブリックを作成させる。	態：南アメリカ州のアマゾン開発にみられる課題について、持続可能性の視点を踏まえて、資源と人々の営みの関係性から捉えようとしている。
		単元を貫く課題 アマゾンの開発はどうあるべきか、提案しよう。		
地域がわかる	3	2 地域的特色と開発問題の因果関係を探る。 (1) アマゾン開発の恩恵と課題を分析する。 ・ブラジルのGDPの推移 ・産業構造の変化 ・先住民の居住区の変化 (2) 環境保全の取組を調べ、新たな課題を分析する。 ・バイオ燃料の精製 ・アグロフォレストリー ・栽培面積の拡大 ・内陸部との経済格差 (3) アマゾンの開発と環境保全が両立できる取組を考察する。 ・アマゾンの森開発計画 ・開発計画をめぐる様々な立場からの意見 ・南アメリカ州の強みを踏まえた持続可能な取組	○ 熱帯林開発が進む要因を捉えさせるために、ブラジルのGDP推移や輸出品目の変化の資料を提示し、アマゾン開発による恩恵と課題を問う。 ○ 環境保全による新たな課題に気付かせるために、農産物の栽培面積の変化やブラジルの失業率の推移を比較させ、環境保全の取組を積極的に進めた場合に困ることを分析させる。 ○ 南アメリカ州の強みを見出させるために、開発計画をめぐる様々な立場からの意見に着目させ、南アメリカ州の価値は何かを問う。 ◎ 再考した取組が持続可能であるか吟味させるために、南アメリカ州の強みを加えた評価基準を提示し、レーダーチャートに表現させる。	知：アマゾン開発による恩恵と課題を捉え、資料と関連付けて説明することができる。 思：環境保全の取組があるにも関わらず、アマゾンの開発が進められるブラジルの現状について説明することができる。 態：アマゾンの開発に対する見解が多角的であることを踏まえ、再考した取組の妥当性をルーブリックと照らし合わせて振り返ろうとしている。
地域を考える	2	3 南アメリカの課題を解決する取組を提案する。 (1) 持続可能な開発の取組の資料を作成する。 ・南アメリカ諸国がとるべき方策	◎ 持続可能な社会を築くための取組を多面的・多角的に捉えさせるために、評価の視点を踏まえたレーダーチャートを用いて分析させる。	
	本時	(2) 他のグループの取組の妥当性について議論し、アマゾンの持続可能な開発を提案する。 ・経済活動と環境保全のバランス	◎ 人間と自然環境との相互依存関係について説明させるために、相互評価の場を設定し、根拠に基づく取組であるかを比較させて、自己の価値判断を表現させる。	態：アマゾンの持続可能な開発を説明することで、南アメリカ州に見られる経済と環境のバランスについて、解決策を見出そうとしている。

5 本 時 令和5年2月1日（水） 第4校時 計画 第三次の2 1年1組教室にて

(1) 主 眼

○ アマゾンの熱帯林の持続可能な開発につながる取組を発表する活動を通して、南アメリカ州に見られる人間と環境の望ましい相互依存関係を捉えることができる。

(2) 準 備

①アマゾンの森林消失面積の累計のグラフ ②ブラジルの所得格差の推移のグラフ ③評価の視点を示したレーダーチャート ④取組の具体性や妥当性の判断基準となるルーブリック ⑤世界の牛肉生産量と輸入量を示した表 ⑥ブラジルの地域別飼養頭数増減を示したグラフ ⑦単元振り返りシート

(3) 過 程

学習活動・内容	準備	手だて（○），研究に関する手だて（◎），評価（◇）	形態	配時
1 アマゾンの開発の課題が何であったかを考察する。 ・人々を支える熱帯林 ・優先される経済発展 めあて 発展と保全の両立って難しいの？よりよい解決策を提案しよう。	① ②	○ 経済発展と環境保全の両立が難しいことを捉えさせるために、ブラジルの所得格差の推移とアマゾンの森林焼失面積の資料を提示し、熱帯林伐採が再び増加している理由を問う。	一斉 ↓ ペア ↓ 一斉	5
2 単元の初めに作成したルーブリックを確認し、相互評価の準備をする。 ・南アメリカ州に見られる地理的事象の価値	③ ④	◎ プレゼンテーションの評価を明確にさせるために、ルーブリックを提示し、持続可能性や実現可能性を踏まえた取組であるかを確認させる。	一斉	5
3 アマゾンの開発計画について、取組の内容や効果について話し合う。 ・経済発展と環境保全が相互に与える影響	⑤ ⑥	◎ 提案された取組が、アマゾンの持続可能な開発に向けて、具体的に妥当なものであるかを吟味させるために、根拠の示された取組であるかを判断するルーブリックを提示し、相互評価を行わせる。 ○ 取組が「環境保全を進めるべき」という提案に偏っている場合は、経済に与える影響に着目させるために、世界の牛肉需給に関する表とブラジルにおける牛の地域別飼養頭数増減を示した資料を示し、他地域とのつながりはどう変化するのかを問う。	ペア ↓ 小集団	2 5
4 自分の考えを見直し、根拠に基づく結論をまとめる。 ・人間と環境の相互依存関係におけるよりよい在り方 ・持続可能な社会づくりに関わる価値判断	⑦	◎ 人間と環境の相互依存関係に着目させるために、単元の最初に提案した取組のレーダーチャートと比較させて、数値が変化した根拠となる資料は何かと問う。 ◇ アマゾンの持続可能な開発の実現可能性について、経済発展と環境保全の両立の視点から捉え、南アメリカ州がもつ価値を踏まえながら、解決策を提案することができる。 <振り返りシート記述分析・様相観察>	個 ↓ 一斉	1 5